

資料 58.2019 年 6 月 21 日「湯浅美仁著（2019）『前穂高岳東壁遭難 63 年目の検証
ナイロンザイル事件の光と影』（北白川書房）に対する見解」

2019 年 6 月 21 日

関係各位

石岡繁雄の志を伝える会
代表：石岡あづみ

**湯浅美仁著（2019）
『前穂高岳東壁遭難 63 年目の検証 ナイロンザイル事件の光と影』（北白川書房）
に対する見解**

1 主旨

本書は、事実に基づいた「検証」ではない。高井利恭氏の生前の言葉から、著者湯浅氏が臆測や妄想を膨らませ、氏に都合の良い部分だけを切り取って結論を導き出したもの、つまり「捏造」と言わざるを得ない。

本書は、2011 年に湯浅氏が書いた『前穂高岳東壁遭難 50 年目の検証 — ナイロンザイル事件の光と影—』の原稿を底本としている。その原稿については、2012 年 2 月 9 日の著者湯浅氏、高井氏、石原國利氏、澤田榮介氏による会談の場で、当事者である石原・澤田両氏から強い非難を受けている。その結果、湯浅氏本人が「絶対に公表しない。印刷物は回収して破棄する。」と約束したものである。

湯浅氏は破棄したはずの原稿に今回新たな部分を書き加えて本書を出版し、唐突に郵送・配布した。そこには、主要な関係者への取材検証がなされていない。

破棄すると約束した 7 年前と変わりなく、思い込みと決めつけで石岡繁雄を誹謗中傷し、当事者である石原氏や澤田氏らを冒瀆し、岩稜会の団体としての名誉をも汚す「検証」に値しない内容となっており、看過することはできない。

2 反証の要点

湯浅氏の論証には繰り返しが多いため、論拠として挙げている点を以下の(1)～(5)に分類した。詳細については別紙「反証詳細一覧」にて確かな根拠をもって列挙する。ここでは要点のみを述べる。

(1)「奥又合宿備忘録」の存在について

備忘録は遭難事故直後、情報が錯綜する混乱状況の中で書かれたメモや伝聞をもとに上田定男氏らが書いたと思われる。内容に関して、証言者への確認や正確さの検証がないため誤りが多く、石岡繁雄が当時の「混乱ぶりを伝える資料」として保管していたものである。

後に、石岡あづみが岩稜会の会合の場で誰が書いたのか確かめている。それをもって湯浅氏は「50年経った今、なぜ見つかったか」と記述しているが、もし隠しておくべきものであったなら会合の場で公開したり岩稜会員に尋ねたりはしない。

(2)「吊り上げ」の有無について

「奥又合宿備忘録」での室敏弥氏談の一文を湯浅氏は新事実として重要視しているが、室氏は故人であり、いつ誰から聞いたのか、又聞きしたことを報告したのか、伝聞の経緯が不明である。

当事者である石原氏は、「確保していただけです。『吊り上げ』は一度も起きていません。この本を見て初めて知りました。そんなこと一度も言っていない」と明確に断言されており(2019/6/5)、事実として「吊り上げ」はなかった。

NITE(独立行政法人製品評価技術基盤機構)の長田敏氏(2019/6/8)、菊地久氏は、「吊り上げて吊り上げなくても切れる」と断言してみえる(2019/6/11)。ナイロンザイルは鋭い岩角に弱く、ナイロンザイルの脆弱性こそが大事な点であるのに、湯浅氏は自作の稚拙な実験(ナイロンロープの溶解切断時の特徴である水玉模様を作るためか、予想切断荷重の10倍以上かけるなど)によって、暗に「石原氏が若山を吊り上げたので足を滑らせ滑落

させた」と言わんとする推測は論外である。

(3) チーフリーダー指示の有無について

湯浅氏は高井氏の推測を裏づけるものとして、誤りの多い「奥又合宿備忘録」のみを正としているが、その中にも「指示」についての記述はない。同録の「引き返すことになっていた」は誰の言か不明である。

澤田氏はチーフリーダーの指示について、「明確な指示，ミーティングともになく，行動は現場判断で決め，指示違反はない」（2012/2/9）と述べている。また，石原氏も「明確なものではなかった。前進か引き返すかは現場の状況判断が優先されなければならない。私たちは引き返すことの危険と登攀を続けることの危険を比較し，登攀する方が安全という結論になった」（2019/6/4）と同様のことを述べている。

湯浅氏は，その当時の山の現場における現実を知らない。現実にはそぐわない推測を根拠としていると言わざるを得ない。なお，2006年5月7日の石岡・高井会談を拠り所に「石岡はこの『指示』の存在を認めた」とあるが，当時の石岡（同年8月15日逝去）は記憶も気力も衰え人との会話に耐えられない状態にあり信憑性に欠ける。

(4) トップ交代について

トップの交代について，石原氏は「成り行き（若山がトップ交代に即対応）」と述べている。澤田氏は、「誰がトップに立っても危険は避けられない。その結果は全員に及ぶこと，同体であることを3人は認識していた。若山が駄目なら夏ルートで再チャレンジすべきかと考えていた」と述べている（2012/2/9）。

また，若山氏の起用とザイル切断には因果性がない。ナイロンザイルに従来の麻ザイルでは考えられない「岩角での脆弱性」がなければ，若山氏は墜死していないのである。

(5) 遭難の総括がされなかったことについて

前穂高遭難事故後に遭難の総括がなされなかったのは、それよりも大きな「ナイロンザイル事件」問題が起きたためである。当時、未熟な登山が遭難の原因だとする批判が出ており、中傷によってナイロンザイルそのものの問題がうやむやにされる恐れがあった。実際、ナイロンザイル切断による事故が相次いだ時期であり、登山者の命を守るためのザイルの強度について真相を明らかにすることの方こそ優先された。この「ナイロンザイル事件」が決着をみるまでには、20年を要している。

高井氏は、遭難事故が起きたことで自分が挑戦するはずであった「前穂高岳4峰正面北条・新村ルート」初登攀が取り止めとなり、さらにナイロンザイル事件のために登山活動が抑えられていた岩稜会に不満を募らせていた。全く協力しないばかりか、石岡繁雄氏を執拗に責め立てていたと、岩稜会会員たちの記憶に刻まれている。登山家としては優秀であった高井氏に心酔していた湯浅氏は、高井氏の思いに寄り添う本書を刊行したのであろう。しかしながらその思いは、捏造や他の関係者の犠牲の上になされるべきではない。

日本はおろか世界で初めて「登山用ロープ」の法規制にまでこぎつけ、「ザイル切断事故防止」を成し遂げたのは、まさに一心不乱にこの問題に取り組んできた石岡繁雄の「志」だったのだ。

【問い合わせ先】

石岡繁雄の志を伝える会

代表 石岡あづみ

〒513-0801 三重県鈴鹿市神戸2丁目6番25号

059-382-1228 090-9020-3919

「石岡繁雄の一生」HP：

<https://shigeoishioka.com/>